

第63回 歴史探訪の会 「聖武天皇の紫香楽宮跡を訪ねて」

実施日：2018年7月18日(水曜日)
場所：滋賀県甲賀市
案内人：林 寛

コース：信楽高原鐵道 紫香楽宮跡駅 ～ 甲賀寺 ～ 鍛冶屋敷遺跡 ～ 新宮神社遺跡 ～ 宮町遺跡・宮町会館(昼食) ～ 宮町展示室 ～ 信楽高原鐵道 紫香楽宮跡駅 (歩行程 約4km)

この日の信楽地方は 35°C近く、各地では40°Cを超えたところもあった猛暑の中、熱中症が心配でしたが、参加者のみなさんは「暑い！暑い！」と言いながらも、適宜水分を補給しつつ、元気よく行程を巡りました。道中暑くても、木陰に入れば吹く風が体を心地よく冷やしてくれ、ほっと一息つくことができました。13名の方に参加頂き、甲賀市教育委員会 歴史文化財課のガイドさんの興味深い案内により、聖武天皇の紫香楽宮跡を満喫できました。

【甲賀市と信楽高原鐵道】

紫香楽宮跡は滋賀県甲賀市(こうかし)にあります。甲賀市は甲賀郡の旧5町が合併してできた市で、人口は9万1千人、「こうか」とにごらない読みは、甲賀市ができた時に決まったとのこと。紫香楽宮跡まで鉄道を利用する場合、JR 草津線貴生川駅で信楽高原鐵道信楽線に乗り換え、紫香楽宮跡駅で下車します。忍者列車が乗客を楽しませてくれます。



【紫香楽宮跡駅集合】

紫香楽宮跡駅に着くと、信楽焼きの名物「狸」が出迎えてくれました。無人駅を出たところには甲賀市の大きな観光案内があり、探訪の気分を盛り上げてくれました。





参加者 13 名は木陰に集し、ガイドさんを紹介、紫香楽宮跡探訪の参考資料配布、探訪コース概要説明、熱中症対策など当日の注意事項を確認しました。

紫香楽宮跡駅を出発、国道 307 号線を渡るとそこは閑静な新興住宅地域、史跡への案内板は 1 か所にあるだけです。最初の探訪地「甲賀寺 史跡紫香楽宮跡(内裏野地区)」に向かいます。徒歩約 10 分の道のりです。



【甲賀寺 史跡紫香楽宮跡 ((寺院跡)内裏野地区)】

「内裏野」と呼ばれる丘陵には、江戸時代から大きな礎石と古瓦の出土が知られ、大正 15 年(1926)に宮殿跡として国史跡になりました。しかし、その後の発掘調査で、礎石配置が東大寺の伽藍配置と類似し、恭仁宮跡に創建された山城国分寺跡と同範瓦が出土することから、現在では寺院跡であることが判明しています。この寺院跡は、大仏建立のために創建された「甲賀寺」、または平城還都後に「甲賀宮国分寺」として記録に現れる寺跡、のいずれかと考えられます。



甲賀寺入口でガイドさんから説明を聞く



礎石配置の全容と寺院復元図



早速 甲賀寺(史跡紫香楽宮跡)前で集合写真、暑さに負けないうちに・・・

境内には、金堂跡、講堂跡、僧房跡、塔院跡があり、配置が奈良東大寺の伽藍配置とよく似ています。僧房跡の礎石配置は、広い室(偉いお坊様向け)と、狭い室(一般のお坊様向け)の2種類がありました。塔院の周辺には1,200年以上前の瓦の破片が散在していました。瓦表面は白っぽく、当初炭化させて黒かった瓦表面が、火事のために炭素が燃えて白化したものだそうです。また、瓦表面には製造時にできた布目模様がありました。



金堂の説明碑



講堂の説明碑

僧房跡で
ガイドさんの
説明を聞く

炎天下、でき
るだけ木陰を
求めて..



塔院の説明碑



布目模様をもつ古代瓦

【鍛冶屋敷遺跡（鍛冶屋敷地区）】



甲賀寺から約400m北東に鍛冶屋敷遺跡があります。鍛冶屋敷遺跡は、奈良時代の銅製品鑄造施設や官衙建物がみつかった遺跡で、約13,500m²の範囲が史跡紫香楽宮跡として追加指定されました。奈良時代のものでは現存の奈良東大寺の次に大きい、直径1.7mの梵鐘がこの地で造られたことが判明しています。通常、銅鉱石から銅を取り出す時には、大量に銅以外の屑が発生しますが、ここではその屑が全く出土しないことから、銅鉱石から銅を取り出す工程は、別の場所で行われたと考えられるそうです。

【新宮神社遺跡】



案内板



新名神高速道路の橋脚下に遺跡がある

鍛冶屋敷遺跡から5分ほど歩いたところ、隼人川を渡り、新名神高速道路の真下に新宮神社遺跡があります。ここは宮町遺跡への唯一の開口部にあたり、紫香楽宮の玄関口に所在する遺跡です。発掘調査では、掘立柱建物3棟、井戸1基、旧河道1条、橋脚遺跡、2本の道路遺構が発見され、これらの遺構からは紫香楽宮期の遺物が数多く出土しました。3棟の建物は道路管理や交通整備を行った役所だと推定されています。橋脚遺構のうち、橋脚部材とみられるヒノキ材の伐採年代が天平16年(744)であることも判明しています。道路遺構2本の幅員は約12m、約18mあり、紫香楽宮の玄関口にふさわしい規模といえます。

遺跡の上を走る新名神高速道路の橋脚はすさまじく、橋脚1本に使うコンクリート量で、8階建てのビルができるそうです。また通常、高速道路に降った雨水を橋脚の地下に造ったプールに貯めるそうですが、ここは地下に遺跡があるのでプールは地上部に造ってあり、橋脚下部が盛り上がっています。

【宮町遺跡 史跡紫香樂宮跡（（宮殿跡） 宮町地区）】



紫香樂宮歴史街道の案内板



炎天下 木陰のない道を行く

新宮神社遺跡から宮町遺跡までの約1kmはこの日一番の難所でした。カンカン照りの猛暑日のお昼前、まったく日影がない道をひたすら歩き続けました。道の両側には、1区画30m×100mの水田が何区画も延々と続きます。緑の絨毯になった稲の上を渡る風が、水田にきれいな模様を作っていました。

やっとの思いでたどり着いた宮町会館は、紫香樂宮跡のほぼ中央にあります。地区会長様のご厚意で、昼食場所として使わせていただくことができました。エアコンが効いた室内は別天地、生き返りました。



紫香樂宮跡中心部近くにある宮町会館前で



宮町会館近くの説明板：宮町地区発掘調査結果の概要を示しています



昼食後 宮町会館前の説明板を見ながら遺跡発掘結果についてガイドさんの説明を聞く

紫香楽宮がどこにあるのか、正確な場所は長い間はつきりませんでした。ところが地域一帯で水田の区画整理事業が開始され、昭和51年(1976)に宮町地区で大きな柱根が出土していたことが判明しました。さらに、昭和56年(1981)からの遺跡分布調査で宮町・黄瀬(きのせ)・牧地区に奈良時代の遺跡を確認しました。出土柱根の伐採年代が、紫香楽宮造営時期に一致する天平14年秋から15年春に特定できたので、宮町地区に重要遺構があると推定でき、昭和59年(1984)から発掘調査を始めました。

調査では奈良時代の遺物が大量に出土しました(全体のわずか5%の発掘で出土した木簡 7300 点は全国5位)。平成12年(2000)には、宮町中心部で「コ」字型に配置された100mを超える長大な建物跡が見つかり、これらは東西の「朝堂」、および「朝堂前殿」と考えられ、ここが紫香楽宮中枢部であることが確定しました。

【出土した「歌木簡」と「歌一首」墨書土器】；「天平の都と大仏建立」甲賀市教育委員会編(平成30年)参照
平成10年(1998)の第22次調査で、表と裏に「歌」が書かれた木簡が出土しました。再調査によって、ひとつは「あさかやまの歌」、もうひとつは「難波津の歌」と判読できました(木簡には万葉仮名で記載)。

あさかやまの歌 ; 安積香山 影さへ見ゆる 山の井の 浅き心を 我が思はなくに
難波津の歌 ; 難波津に 咲くやこの花 冬ごもり いまは春べと 咲くやこの花

「あさかやまの歌」は『万葉集』巻16の3807番と同じ歌です。この「歌木簡」は、一緒に出土した木簡からみて、天平16年末か17年初めごろに廃棄されたと考えられます。一方、『万葉集』は、15巻本が天平17年から数年の間に成立したと考えられています。ということは、「あさかやまの歌」は万葉集15巻本ができるより前に木簡に書かれた可能性が高い、ということになります。この「歌木簡」の筆者は、『万葉集』15巻本を見て書き写したのではないのです。「あさかやまの歌」は当時、民間に流布していた歌なのでしょう。

「難波津の歌」は『万葉集』には入っておらず、10世紀初頭の『古今和歌集』の「仮名序」に見えます。『古今和歌集』の「仮名序」に、「あさかやまの歌」と「なにはつの歌」は和歌の父母のようなものであり、初めて和歌を習得する人は必ずこの両歌から学ぶものである、という内容が書かれています。このふたつの歌をセットにした最初はいつだったのか。この「歌木簡」の出現により、「仮名序」よりも約150年以上も前に、すでにセット関係が成立していたことが明らかになりました。

もうひとつの重要な発見、それは「歌一首」と書かれた墨書土器で、平成16年度(2004)第32次調査で出土しました。紫香楽宮は、政治や仏教一色の都だったのではなく、多くの役人が歌に親しむ機会を持ち、貴族文化も花開く豊かな都であった様子が浮かびあがってきたのです。



宮町会館の入口でも名物「狸」が迎えてくれました。ただ、この狸は可哀想に檻に入っていました。「なぜ檻に？」と尋ねると、ガイドさんが教えてくれました。会館周りの広場では、近所の子供たちがよくサッカーをして遊ぶそうです。蹴ったボールが狸に当たって痛い目に合わないよう、金網で狸を守っているのだそうです。心優しい宮町の人たちの暖かい思いに触れました。

【宮町展示室】

宮町遺跡発掘調査事務所に併設して、紫香楽宮跡関連遺跡調査事務所 出土遺物展示室があります。エアコンが効いたありがたい室内に出土遺物の一部を展示していました。また、藤村志保さんのナレーションで、紫香楽宮跡をCGで再現した解説ビデオをみることができ、古の都を実感できました。



すべての見学を終え、帰りはタクシーで快適に紫香楽宮跡駅に戻りました。猛暑の中、みなさん元気に探訪できて最高でした。はるばる信楽まで来た甲斐がありました・・・

藤原京、平城京、長岡京、平安京など、周辺の開発により都の姿を変えていく中で、ここ紫香楽宮だけは鄙びたまま古の趣を留めており、私たちは、聖武天皇がご覧になったであろう山々や、きれいな空を今日も目にすることができました。そして地中深くには、志半ばで潰え完成を見なかった紫香楽宮が、その姿を保ったまま今も眠り続けているのです。